

フェノロサールバウンド
芸術叢書

詩の媒体としての漢字考

高田美一 著

アーネスト・フエノロサ||エズラ・パウンド芸術詩論

詩の媒体としての漢字考

高田美一 訳著

東京美術

訳著者略歴

高田 美 一 (たかた・とみいち)

1964年早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了/跡見学園女子大学教授, 早稲田大学・大東文化大学講師。

主 要 著 書

『T・E・ヒューム「思索ノート」研究』(北沢図書出版, 1974) /
『世界文学鑑賞辞典・イギリス・アメリカ編』(東京堂, 1962) 分担執筆 / 『講談社英和辞典』(講談社, 1969) 分担執筆 / 『俳句・漱石・リチャーズ』, 『夏目漱石』(朝日出版, 1978) 所収 / 『詩の媒体としての漢字考』, 『国語学論説資料』(論説資料保存会, 1979) 所収 / 『エズラ・パウンドの『中国詩』その1,2』, 『中国関係論説資料』, (論説資料保存会, 1981) 所収。

主 要 論 文

『俳句・漱石・リチャーズ』, 『イマジズム運動』, 『ヴォーティシズム運動とE・パウンド』, 『E・フェノロサ遺稿に見るE・パウンド『中国詩』誕生の背景に関する考察』その他フェノロサ遺稿とパウンドに関する論文多数。

アーネスト・フェノロサ
エズラ・パウンド芸術詩論
詩の媒体としての漢字考

定価 三〇〇〇円

昭和五十七年五月二十日 第一刷発行

訳著者 高田 美 一

発行者 佐々 藤雄

発行所 東京美術

東京都千代田区神田司町二一七

〇三(二九二)三三三一

印刷所 東京美術制作センター

製本所 関川製本所

© 1982, Tomichi Takata

ISBN4-8087-0072-7 C3098 ¥3000E

序

齋藤 襄 治

敬愛する高田美一教授のこのたびの著書は、長年にわたってエズラ・パウンドの研究に没頭されてきた氏にとって意義深い記念碑となるばかりでなく、わが学界にとっても貴重な資料となることであろう。心よりおよろこび申し上げたい。同時に私はこの研究書が発足して間もない日本フェノロサ学会にとっても大切な業績の一つとなるであろうことを思つて大きなよろこびを感じている。

フェノロサの「詩の媒体としての漢字考」を翻訳し、解説することはつまりパウンドの芸術論の背景を考察することになるのである。本書の完成を機に私は高田教授がこれまでに発表されたフェノロサとパウンドとの関連についての研究のほか、一九七四年に出版された『T・E・ヒューム「思索ノート研究」』を含む重厚な研究書を拝読し、教授が一貫してイマジズムの理論と実践両面を丹念に追求して来られた学者であることを今更のように感じたのであった。ヒュームがパウンド出現の前哨として大きな役割を果たしたことを考えると、私には十数年に及ぶ高田教授のヒューム研究が今回の「漢字考」の訳者と必然的につながっていることを認めざるを得ない。パウンドが「光芒を発する繊細さ」に言及するとき、かれが明らかにフェノロサの「漢字考」を意識

していることを教授は解明している。「詩が再び物そのものに密接するようになって始めてそれは現代芸術の重要な一部を占めることになるだろう」というパウンドの言葉もやはりフェノロサの壮大な思索の海に浮かんでいるようにおもわれると、高田氏は鋭く指摘しておられる。

「漢字考」の正確な翻訳につづく解説もまた教授の綿密な研究の成果である。パウンド自らが「漢字考」の中にあらゆる芸術論の根本問題が論じられていたのべているが、このたび刊行された日英二国語版に附せられた解説により、エリオットよりさらに偉大なパウンドの姿を、そして、フェノロサの稀にみる鋭い考察を知ることができる。

『「耀」・はじめのひかり』は貴重な論文である。私どもはまた高田教授に依って森槐南のフェノロサに及ぼした影響の確証を見ることができると同時にパウンドのノートが槐南の講義の機械的な再現でないことも教えられる。さらに最近その選集が刊行された平田禿木が「漢字考」の成立に当って微妙な役割を果していることを告げられ、驚きに目をみはる想いがする。

一九六三年に詩人ロレンス・ファースリンゲティと知り合った私は氏が私のすすめで、一九三六年版の「漢字考」を自ら経営するシティ・ライツ社から出版することを決意してくれたことをありがたく思っている。

この画期的な業績がひろく日本の研究家に読まれんことを切に祈るものである。

詩の媒体としての漢字考／目次

序

齋藤 襄治

○

エズラ・パウンド序文——一九一八年——

詩の媒体としての漢字考

○

『漢字考』解説

「耀」・はじめのひかり

——フエノロサからパウンドへ——

I

II

III

IV

V

森槐南||アーネスト・F・フエノロサ||エズラ・パウンド

——「中国詩史」講義遺稿とエズラ・パウンド——

I

II

III

IV

V

あとがき

*

Introduction

by

George Saito

5

*

The

Chinese Written

Character

As a Medium for Poetry

7

エズラ・パウンド序文——一九一八年——

この試論は、故・アーネスト・フェノロサが事実上、書きあげた。わたくしは、ただ、わずかの箇所の反覆をはぶき、わずかの文章をととのえただけだ。

ただたんに、言語学上の論議だけでなく、あらゆる芸術論の根本問題がここに論じられている。未知の芸術を探究し、フェノロサは、西洋では認知されていない未知の動機や原理に出くわして、それらが**新しい**西洋の絵画と詩に実りをもたらすので、すではやくも、さまざまな思索のなかに引きこまれているのだ。フェノロサは先駆者であつた。自ら先駆者を意識せず、人からもそうとおもわれぬうちに。

フェノロサは文体の原理を悟得したのだ。それを実行に移す時間をほとんどもち得なかつたが、日本でフェノロサは、西洋のものでない民族固有の芸術にたいする尊敬の気もちをあらためて意識した。いやあらためて意識させられたというべきである。アメリカとヨーロッパで、フェノロサは、たんにエギゾチックなものの探究者とみなされてはならない。その心は、絶えず東洋と西洋の芸術の相似点を考え、また両者を比較することに没頭した。フェノロサにとってエギゾチッ

クなもの、たえず結実（fructification）の手段であつたのだ。かれはアメリカの文芸復興をめざしていたのだ。かれの展望がたいへんな活力にみちていることは、この試論が一九〇八年のかれの死のなん年前に書かれたのであるが、西洋のかなしい状態を示唆したアリユージョンを、わたくしが書きかえる必要がなかった、ということに照らしても察しがつく。芸術のその後の運動はかれの理論を確証したのだ。

詩の媒体としての漢字考

この二十世紀は、世界の書物のただ新しい頁をめくるということではなく、別のおどろくべき新しい章を開けることなのだ。不可思議な将来への展望がひろがっている。ヨーロッパから、なかば乳離れした全世界を包容する文化、国民や民族にとってこれまで夢にも考えられなかった責任が伴う展望、がひろがっている。

中国問題のみでも、あまりにも広大で、いかなる国民もそれを無視することはできないのだ。とくに、アメリカのわれわれは、太平洋の彼方のその問題に対処し、それを充分に学ばねばならない。そうしないと、中国問題がわれわれを圧倒するようになるだろう。中国問題に通暁する唯

一の方法は、辛抱強い同情心をもって、中国問題のもっとも立派な要素、もっとも希望のもてる、もっとも人間的な要素、を理解するよう奮闘努力することなのだ。

イギリスとアメリカが非常にながい間、東洋文化の深遠な問題を無視したり誤解したりしてきたことは不幸なことであつた。われわれは中国人が唯物的な国民で、墮落し、衰え果てた民族であると誤解してきた。われわれは日本人をものまね民族だと見くびってきた。われわれはおろかに、中国の歴史は、社会の進化で、ひとかけらの変化も示しておらず、道徳上の、また精神上的のいかなる顕著な時代も示していないのだという態度をとってきた。われわれは、これらの国民の本質的な人間性を拒絶してきたのだ。そしてわれわれは、これらの理想を「オペラ喜劇」のコミック・ソングのようにもてあそんできたのだ。

われわれに課せられた義務は、かれらの砦を破壊し、またかれらの市場を利用することではなく、かれらの人間性や、雅量のある抱負を学び、それに同情を示すようになることなのだ。かれらの教養のタイプは高かつた。記録されたかれらの経験の收穫はわれわれに倍している。中国人は理想主義者だつた。そして大原理を創造することで、実験者であつた。かれらの歴史は、古代の地中海民族の世界にも匹敵するような、高邁な目標と達成の世界を開いてくれるのだ。われわれは、われわれ自身の理想をおぎなうのに、かれらの最高の理想を必要とする。かれらの芸術、かれらの文学、かれらの生活の悲劇、のなかに秘藏せられている理想を必要とするのだ。

東洋の精神に到達する鍵として、われわれはすでに、かれらの旺盛な活力の証拠を見、われわれ自身に役立つ東洋絵画の事実上の価値をみてきた。かれらの文学、文学のもっとも凝り固まつ

た部分であるかれらの詩、に接することは、たとえ不完全なやり方でも、価値あることとおもう。

あつかましくもわたくしが、デイヴィス（*Sir John Francis Davis* 中国名「達庇時」、一七九五—一八九〇）、レ

ッグ（*James Legge* 中国名「理雅格」、一八一五—一九七、イギリス、スコ）、植民地政治家、漢籍の翻訳多く、中国研究家）

（*Utstrand* の宣教師、中国学者、オックスフォード中国学講座初代教授）、サン・デニー（*Hervey de Saint Denys* 中国学者）

、ジャイルズ（*Herbert Allen Giles* 中国名「翟理斯」、一八四五—一九三三）など、一連のすばらしい

学者たちのあとを追うことに、なんとなくわたくしは弁解したいような気がする。これらの学者

は、わたくしが異議を唱える余地のない豊かな学識で、中国詩という主題を取り扱っているの

である。わたくしが、ぜひとも言わねばならぬことを、そもそも提言しようとするのは、専門の語学

者としてでもなければ、また中国語学者としてでもない。東洋文化の美の熱心な一人の研究者と

して、東洋人たちと親しく接することにわたくしの生涯の大部分をささげて、東洋人たちの生活

の血肉と化生しているその詩の精髓のなにかを、いやがうえにも、わたくしは呼吸体得せざるを得なかったのである。

※パウンド註、この弁解は必要ではなかったのだ。しかしフェノロサ教授が弁解するのがよいとおもったことなので、それで、わたくしはかれのことを転写しておく。

わたくしは、無鉄砲にも、ほとんど大部分、個人的な考察に動かされてあつかましい結論に達した。中国や日本の詩は、たんなる楽しみ以上のもではなく、ちつぽけで、子供っぽく、世界の真剣な文学活動においては、評価すべきものはなにもない、という不幸な意見がイギリス、アメリカ両国で広まっている。専門の語学の研究をのぞいて、これらの詩の分野はまったくつまら

ぬもので、その研究に要する労力に値しないのだ、と有名な中国学者がのべた意見をわたくしは聞いたおぼえがある。

ところで、わたくし自身の印象は、そんな結論には根本的に、正反対であったのだ。それでわたくしは、義侠的な情熱の激するあまり、そんな学者とは別の立場の西洋人たちと、わたくしの新しく発見したよろこびをわかちあいたいという切望にかりたてられたのである。わたくしが、まぎれもない確かなよろこびで、自己満足して、自らをあやまりみちびいているのか、それとも中国詩を紹介する慣習的な方法に美的な共感や詩的な感情のなにかが欠けているのか、どちらかでなければならぬ。わたくしはわたくしのよろこびの原因を提示することとする。

どんな外国の詩でも、それを英語に表現して成功するか否かは、主として、えらばれることばにおける詩の技術によらねばならない。やっかいな漢字ととり組んで青春をすごした老学者たちが、また詩人として成功することを期待するのは、たぶん無理なことであつただろう。ギリシャの詩でも、翻訳者がただひたすら英詩の押韻の野暮な基準を守ることのみに満足していたなれば同様に失敗していたかもしれないのだ。中国学者たちは、詩的な翻訳の目的はその詩であつて、辞書における用語の定義ではないことを銘記せねばならない。

わたくしは、たぶんわたくしの仕事に、一つの価値があるだろうと主張したい。それは日本式中国文化研究法をはじめとり入れたことだ。これまでヨーロッパ人たちは、なんとなく、現代の中国研究の学説を鵜呑みにしてきた。数世紀前に、中国はその創造的自我の多くを失い、自身自身の生の根源を洞察する力の多くを失った。しかし、そのオリジナルな精神は、すべてのオリジ

ナルな新鮮さをとどめて、日本に移植され、なおも生き、生長し、意味を伝えているのだ。今日、日本人たちは宋王朝下の中国の文化に、ほぼ匹敵する文化の段階を示している。わたくしは幸運にも、ながい年月のあいだ、森槐南教授の個人的生徒として学ぶことができた。教授は、たぶん、現存の、中国詩の最高の権威であろう。さいきん、東京帝国大学の講座に招かれた。

わたくしの主題は詩であって、言語ではない。でも、詩のルーツは言語にある。中国語がその文字でわれわれのことばと大いに異なっているように、われわれの言語形式とは大いに異なっている言語を研究するには、詩論を構成する形式の普遍的な要素が、どうして詩にふさわしい滋養を生み出し得るのか、ということ調査することが必要である。

どうして眼に映る象形文字でかかれた詩が、真の詩と考えられるか。その理由は、音楽のように**時間芸術**(time art)で、音声の連続印象からそのユニティ(unity)を織りなす詩が、ついに、主として眼になかば絵のように訴えることばの媒体を、自分のものにすることができた、とおもわれるからだ。

たとえば

※
The curfew tolls the knell of parting day

晩鐘の音、暮れゆく日を告げ鳴らす

というグレイの詩句と

月耀如晴雪

Moon

Rays

Like

Pure

Snow

という中国詩の詩句をくらべてみる。中国詩の音声が表示されないとすれば、両者の詩句はどんな共通性をもつか。両者ともある散文的なひとかたまりの意味をもっているのだ、という証拠をあげても充分ではない。なぜかなれば、問題はこうしてこの中国詩の一行が、**形式として(as form)**、散文にみられない詩の特質を示す、その要素を含み得るか、ということだからである。

※筆者註 Thomas Gray (1716—71), "Elegy written in a country churchyard." The curfew tolls the knell of parting day, / The lowing herd wind slowly o'er the lea, / The plowman homeward plods his weary way, / And leaves the world to darkness and to me. 晩鐘の音、暮れゆく日を告げ鳴らし、／牛の群鳴きつつ牧場をねりすむ。／農夫つかれてとぼとぼと家路をたどり、／夕闇覆いせまってわれただひとり。

つぎに、一見して一連の漢字は、視覚的であるが、グレイの音声のシンボルとおなじく、必然的な順序にならべられていることがわかる。詩の形式が必要とするすべては、ただ、思想そのものとおなじくプラスチックで、ある規則正しいフレキシブルな連続ということだ。その一連の漢字は

Moon rays like pure snow.

と、ひとつ、ひとつ、眼に映じて、黙読される。

たぶんわれわれは、つねに、かならずしも充分に、思想が連続的なものとは考えないのだ。思想は、われわれの主観的なはたらきの偶然のかよわなできごとではなく、自然のさまざまなはたらきが連続的であるがために、思想が連続的である、と考えないのだ。行為者から目的物へとつたわる力の転移は、それが自然現象をなしているのだが、時間を占める。それゆえに、力の転移を想像のなかに再生するには、自然とおなじ時間の秩序を必要とするのだ。[※]

※パウンド註、レトリックにたいし、文体、つまり、明晰さ (impidity) ということである。

筆者註、パウンドが「明晰さ」といったことは意味深長である。エリオットはパウンドのこのことばを *translucency* (easily understandable; lucid) の意味に用い、パウンドの翻訳が *translucency* であるという。(Intro. to *Selected Poems* by Ezra Pound, 1928, p. xvii) 「自然の力の転移」は、時間の秩序をなして、脳中の「思想の流れ」に一致する。「思想の流れ」を転写する「文体」は、つまりは「自然の力の転移」、「因果関係」を転写することで、ごまかしがきかない。ごまかしのない「文体」が「明晰」はつきりと理解される」ということになるのだ。

窓から一人の人物をみるとする。その人物は突然、首をまわしてなにかを注視する。注意してみると、その人物の眼は、一匹の馬に向けられていたことを知る。さいしょ、われわれは、行為をおこす前のその人物をみた。つぎに行為中の人物をみた。さいごに、その行為が向けられた物をみたのだ。ことばで、われわれはこの急速な行為の連続を分割する。光景の連続、を正しい順序の三つの本質的な部分、つまり関節に分割する。そして

Man sees horse

という。

この三つの関節、つまりことば、は、たんなる三つの音のシンボル(ゴシック者)であることは明瞭であるが、これが自然のプロセスの三つの条件を示している。しかしわれわれは、いとも容易に、われわれの思想の三つの段階を、おなじく任意のシンボルで示すことが可能なのだ。それは音節になんの基盤もたぬものだ (which had no basis in sound)。たとえば三つの漢字で

人見馬

Man Sees Horse

と示すことができるのだ。

もしわれわれすべてが、この心のなかの馬の居る絵のどの区分 (what division) を、それぞれの記号が示しているかを理解すれば、われわれは、ことばを話すのとおなじく、それらの記号の絵をかく (ゴシック者) ことによって容易に、連続的な思想をおたがい伝達できるのだ。われわれは習慣的に、これとまったくおなじやかたで、眼に見える身振りことばを用いているのだ。

中国語の表記方法は、任意のシンボルとは、はるかに異なったものである。それは、自